江戸日本の街道探訪　１１

■地図1）

中山道（２）皇女和宮の江戸への旅

* 文久元年（１８６１）、和宮内親王が第14代将軍徳川家茂に降嫁。江戸への旅路は、東海道か中山道か。決定が下されるまで、双方の街道の路面整備が行われた。最終的に、川止めの恐れが二カ所ぐらいしか無く、警護もしやすいと言うことで中山道に決定。和宮一行は、文久元年10月20日に（今の１８６１／１１／２２）京都を出発した。江戸まで25日間の長旅である。
* 一行は人数、約2万人。行列の長さは、のべ77kmに及んだ。これほどの大行列は、後にも先にも例を見ない。例えば、和宮が中津川宿に宿泊した際、行列の第一陣（先頭）は、何と七つ先の宿場、53キロ先の上松宿にいる。第一陣には、三条中納言、公家の中将、少将それに奉行の他、人足3500人以上が参加。使われている馬は120頭。次に行列の第二陣は、馬籠、妻籠宿の先の三留野宿にあり、大納言など公家の要職を務める人及び武家及び人足3050人、馬124頭があてがわれていた。第三陣が本行列で、和宮親子内親王以下が宿泊する中津川宿。身の回りの世話をする公家、武家など約4000人、人足約1万4000人、馬405頭。そして中津川宿から24km後部（京都側）にある大久手宿に最後尾の第四陣がおり、此処にも多数の武家、公家の他に人足２５００人以上がいた。こういう状況である。あでやかな衣服を身にまとった、都人の行列が山々を越えて続いているといった光景である。行列の間に美しくも豪華な御輿車が何台も続く。
* 道路整備・警備、宿場での警備、運営など巡行に関係した者全てを数えると20万人に及ぶと云われる。将軍家茂は御輿の警護に12藩、沿道警護に29藩を動員し、幕府の威信をかけて安全確保に万全を期した。あでやかな大きな御輿も4つ用意し、そのどれかに和宮を乗せるという欺きの策も講じている。また和宮様が少しでも旅を楽しめるように、名勝を通るときなどは、御輿を留めて添番が説明したという。
* 京都を出発してから和宮が宿泊した宿場は次の通り。大津宿、守山宿、愛知川宿、柏原宿、赤坂宿、加納宿、太田宿、大湫宿、中津川宿、三留野宿、上松宿、薮原宿、本山宿、下諏訪宿、和田宿、八幡宿、沓掛宿、坂本宿、板鼻宿、本庄宿、熊谷宿、桶川宿、板橋宿の23宿。そして旧暦の11月15日（現12月16日）に江戸に到着している。
* 大行列の内容は、和宮に直接付き従うお供の者、江戸から迎えに来る人、朝廷から付き従う人、前後左右警護の武士、荷物運搬人で構成されている。その数、約2万人。これが一列に並ぶと長さ７７ｋｍに及び、一つの宿場を通り過ぎるのに４日かかったことになる。有力大名も参勤交代で中山道を使っているが、この規模はその比ではない。
* 街道沿いの住民は、それこそ大変で、犬などがお姫様を脅かさないように管理する命令が出た。このため行列が通り過ぎるまで、犬も放置できず、家にじっとしている状態だったという。

江戸から京都へ

* さあ、今度は、江戸から京都へ中山道を旅しよう。家康の江戸都市計画の原点､日本橋から出発する。江戸有数の商業地、三井呉服店が両側に並ぶ駿河町を通って北へ。大勢の人が行き交っている。直に追分に出る。右へ行くと日光街道。中山道はまっすぐ。神田堀、昌平橋を渡り、左手に湯島聖堂、昌平坂学問所を見つつ、本郷通りをどこまでもまっすぐ。右手に加賀藩前田家の上屋敷。やがて本郷追分一里塚。追分を左折。どんどん行くと巣鴨。左に真性寺。旅の安全を祈願する、大きな地蔵、江戸六地蔵が立っている。家々が立ち並び、右に、とげぬき地蔵で有名な高岩寺。大勢の人が地蔵を清め、身体健全を祈願している。ここは江戸時代も大変な人出である。そして庚申塚に出る。雪旦描く「巣鴨庚申塚」。絵の右端、中央に大きな庚申塚が描かれている。それに増して驚く人の数。休憩所、馬手配、籠職人、遊んでいる子供。数本の立木に長い葦簀張りの屋根を括り付け、その下で雑談する人、拝む人、煙草を吸う人、庚申塚を中心に江戸の生活が生き生きと描かれている。中山道を旅する大勢の人が描かれている。馬に乗る人､籠に乗る人、歩く人。
* 庚申塚を過ぎると辺りは見渡す限りの田園に変わる。どんどん行くと滝野川を通り、平尾の一里塚に出る。さあ、ここから最初の宿場、板橋宿が始まる。日本橋から１０キロ。宿場の手前、左側には板橋の刑場がある。江戸の刑場は、見せしめのため街道沿いに設置されている場合が多い。近藤勇はここで処刑された。一里塚を左折すると彼の墓所（刑場の奥）がある。

板橋宿

* 中山道板橋宿は、東海道品川宿、甲州街道内藤新宿、奥州・日光街道千住宿と比肩しうる江戸四宿の一つである。北の玄関口でもあり、非常に栄えた。宿場は、中山道を挟んで両側に北へと続いている。江戸口にある平尾の一里塚から下宿（平尾宿）、仲宿、上宿と北に延びる。下宿は観明寺付近まで（街道の右手にある）、仲宿は石神井川まで、上宿は川から北口出口まで。全長2.2km。天保年間の板橋宿内人口は2448人。宿内家数573軒。旅籠は54軒。本陣は仲宿に一軒。脇本陣は上宿、仲宿、下宿に各一軒ずつ在った。
* 板橋宿の中心的存在は仲宿で、ここに問屋場、貫目御改所（かんめ・お・あらためしょ＝荷物重量を量り運賃を決める役所）、馬継ぎ場、番屋などが集中していた。むしろ上宿には木賃宿、馬喰宿が多かった。
* 江戸四宿には、いずれも飯盛旅籠が多数存在していたが、板橋宿の場合、下宿（平尾宿）に集中しており、150人もの飯盛女を置くことが認められていた。
* また、上宿の京都側出口付近には、有名な縁切り榎木が立っていたが、皇女和宮が降嫁の際には､縁起でもないと榎木を避ける回り道を設けたという。和宮は、無論、仲宿の本陣に宿泊。最後の宿泊を終え、翌日、江戸城に入った。
* 板橋宿の繁栄ぶりはすごく、雪旦は仲宿、上宿を分ける石神井川に架かる板橋から仲宿の繁栄ぶりを見事に描いている。馬を引く馬子、乗る旅人、ぼてふり、脇本陣らしき屋敷門を潜る侍の姿、旅籠の二階で寛ぐ人、川の流れを見下ろしながら飲み食いする人、井戸や問屋とおぼしき建物、人の混雑。題して「板橋駅」。
* ■２）雪旦「板橋駅」：江戸名所図会中巻ｐ７３６〜７３７：板橋宿の賑わい

蕨宿

* 縁切り榎木を過ぎて上宿の門を出る。北へしばらく行くと志村の一里塚。日本橋から三里である。通り過ぎてどんどん行くと荒川にぶつかる。戸田の渡口（舟渡場）。比較的大きな平船に７〜８人の客と馬も一頭横向きに乗っている。船頭が思い切り、棹を差す。対岸には蕨宿に向かう旅人の姿。松並木が描かれている。
* ■３）戸田の渡船場
* 板橋宿から９ｋｍで蕨宿に着く。周囲は関東平野の田園地帯。蕨宿が整備されたのは、元和年間（１６１５〜１６２４）。本陣２軒、脇本陣１軒、旅籠２３軒、問屋場１カ所、高札場１カ所。旅籠数は、小規模だが、繁盛した。その理由は、荒川が川止めの際、京都からの旅人はここに泊まる。またウナギの名産地でここか継ぎの浦和宿で食さないと当分食べられない。この宿は非常に面白い造りになっている。宿場の周囲に堀を巡らせ､堀に面した家々には小さな跳ね橋が設けられ、早朝におろされ、夜は跳ね上げられた。宿場の出入り口にある木戸も同じ。したがって夜、宿場は隔絶された空間になる。
* 蕨宿にもご多分に漏れず飯盛旅籠があった。此処の飯盛女の客引きは強引で旅人が難儀したという。このため、旅人が安心して泊まれるよう手配する平宿の組合があったという。

浦和宿

* 蕨宿から北へ、僅か５ｋｍで浦和宿に到着。この間に、立場茶屋が数軒在り、携帯食、「焼き米」を販売。浦和宿は日光街道、府中通り大山道（大山詣で）と繋がっているので大いに栄えた。宿場構成は本陣１軒、脇本陣３軒、旅籠１５軒、問屋場１軒、高札場１軒、自身番所１軒。旅籠数は小規模だが一軒一軒の規模が大きいと思われる。
* 浦和宿は何と云っても幕府直轄領（天領）。宿場形成以前に将軍の鷹狩りの休泊施設として有名な浦和御殿があった処。後年、御殿は鴻巣宿に移転したが辺り一帯は幕府管理地で栄えた。浦和宿は、商業市で有名。「市」（月六回開かれた定期市）は戦国時代からの歴史を持つ。ここも鰻料理が名物でほとんどの旅人が鰻を食した。